

# 多義性の下位分類としての microsenses

— *knife* と *card* を例として —

Microsenses as a subcategory of polysemy:  
a case study of *knife* and *card*

大塚みさ

日本語コミュニケーション学科准教授

抄録：

語の多義性の下位分類として Cruse (2000 他) が提唱する microsenses に注目し、「長い単位」の適用とコーパスデータの利用によってその本質をとらえ直すことを試みた。microsenses の代表例とされる *knife* と *card* について、microsenses としての典型例に限らず、他の用法も含めた全体を分析対象としたコーパス分析を行った結果、microsenses 以外の用法においては語彙的なパターン (collocation) が、また microsenses では統合的なパターン (colligation) が、読みを決定づける要素として有効に機能する傾向が認められた。

Summary :

This study was designed to examine microsenses, proposed as a subcategory of polysemy in Cruse (2000), with an application of the concepts of 'extended unit' and corpus analysis. All the occurrences of *knife* and *card* were analyzed, to show typical examples of their microsenses. The result suggests that it is lexical patterns (collocation) that mainly specify the reading in those which are not microsenses, while grammatical patterns (colligation) play a key role in those which are microsenses.

キーワード：多義 (語)・microsenses・コーパス・意味の単位・辞書学

Key words : Polysemy, Microsenses, Corpus, Units of Meaning, Lexicography

## 1. はじめに

語の多義性の問題を考えるとき、必然的に種々の問題点や矛盾に衝突する。近年のコーパスを活用した研究は、意味を担う単位を「単語」に設定する伝統的な見解から、Sinclair (1996) の示すような「長い単位 (extended unit)」という見方に転換することによって、このような問題を解消できることを検証している (Stubbs 2002 他)。

そのような「長い単位」の観点から、改めて単語の特性が全体の意味に与える寄与の仕方を考察してみると、様々な興味深い事象に遭遇する。本稿では、この試みの一例として Cruse が多義性の下位分類として提唱する *microsenses* をとりあげ、コーパスデータの分析を通してその本質を考察する。

## 2. *microsenses* の定義・本質と疑問

Cruse には 1986 年の著作をはじめ、語の多義性や類義性等の意味関係に注目した数々の研究があり、様々な観点から多義性の下位分類を試みている。*microsenses* は Cruse (1986) において *subsenses* として提唱された多義性の下位分類の一つである。これは次の著作 Cruse (2000) にも引き継がれたが、認知言語学の視点を取り入れたことによるものか、その改訂 (Cruse 2003) では *microsenses* に名称を変えている。また、*Cognitive Linguistics* と題する Croft との共著 (Croft and Cruse 2004) における執筆担当部分においても、ほぼ同一の定義のもとに用いられている。本稿ではこの書の第 5 章を Cruse の最新の見解として扱い、それに基づいて *microsenses* の特徴をまとめて示す。以下、断りのない場合はこれによるものとする。なお、この用語はあえて和訳をせずに *microsenses* としてそのまま用いる。

Cruse は *microsense* を「完全な意味に近い性質を備えた二次的な意味単位」として扱う。それが出現する文脈におけるデフォルトでの解釈は、*cat*, *dog*, *sheep* 等の動物名のように、同じ階層レベルにおいて相互に対立したデフォルト的な解釈から適切なものが選ばれる。その典型例としてあげられているのが *knife* と *card* である。

- (1) John called the waiter over to his table and complained that he had not been given a *knife* and fork.
- (2) The attacker threatened the couple with a *knife*.
- (3) I got a *card* the other day from Ralph, who's on holiday in Tenerife.
- (4) Let me give you my *card*; let me know as soon as you have any news.

(Croft and Cruse 2004: 127)

以下の (5) と (6) は (1) (2)、(3) (4) それぞれの上位語的な読みに対応する。

- (5) You can buy any kind of *knife* there.
- (6) The box was full of *cards* of various sorts. (*ibid*)

しかしながら、これらの役割はあくまで二次的なものに過ぎず、決してデフォルトで選ばれるものではない。*knife* についてはカトラリー (1)、凶器 (2) あるいは料理用包丁、また *card* の場合はグリーティングカード (3)、名刺 (4)、クレジットカード等が、デフォルトで選ばれる「下位語の読みのクラスター」(*ibid*) である。一方、その「上位語的な読み」は以下のように特別な文脈を想定して初めて実現されるものであり、決してデフォルトで選ばれるものではない。*microsenses* の持つこのような特性を Cruse はデフォルト特定性 (default specificity) と呼び、「われわれは *microsense* の特徴を持つ語に遭遇したとき、第一にその特定の解釈のうちの一つが意図

されていると仮定し、それがどれであるかを示す証拠を探す」(ibid)と説明している。

これは一見するとプラグマティックスの問題ととらえられそうであるが、Cruse は *microsenses* が文脈による意味の調整 (contextual modulation) を受けない点を根拠として、これを否定している。たとえば、以下の (7) (8) における *friend* の性別は文脈 (この場合は文レベル) から特定されるが、*microsenses* の場合はこのような調整を受けることがない。

(7) My best friend married my brother.

(8) My best friend married my sister. (ibid)

以上に見たような *microsenses* の特徴は、(そこでのその単語の意味を明確に示そうとしているという点で) コンピュータ上のプルダウンメニューに例えることができるであろう。

しかしながら、Cruse は *microsenses* を「完全な意味を持つ単位」(full sense unit) とは認めず、「副次的意味をもつ単位」(sub-sense units) とみなす。full sense unit の認定には対立性 (antagonistics) と呼ばれる特徴が必要とされるが、*microsenses* を束ねる上位語が存在することから、*microsenses* にはこの対立性が欠如しているとみなされるためである。

また、*microsenses* のもつ個別的な意味については「*knife* にはほかにも様々な種類があるが、適切な文脈においては (読みを) 指定する形容辞 (specifying epithet) は不要である」(Croft and Cruse 2004: 129, 傍点筆者) という見解を示している。

これらを受けて、本稿では以下の二点に注目したい。第一に、上の「適切な文脈」は広義での文脈を指していると思われるが、これを読みを決定づける二種類のパターンに置き換えて考察を進めたい。具体的には、Sinclair (1998) が掲げるカテゴリーのうちの collocation と colligation<sup>1</sup> とをそれぞれ語彙的なパターンと統語的なパターンととらえて考察の観点に加え、適用の可否を検証したい。言い換えれば、その語の周辺を含めた「長い単位」の観点から *microsenses* をとらえなおすことになる<sup>2</sup>。

第二に、「適切な文脈」以外でのその語の出現パターンも考察対象とする必要があるだろう。そこで、当該語の *microsenses* としての特徴だけでなく、その他のケースも含めた出現パターンの全貌を分析対象とすることにより、その位置づけをより正確に行うことを目指す。もちろん、分析には作例による典型例ではなく、实例データを適用することがより有効であることは言うまでもない。

次の章では、*microsenses* の典型例として提示される語例について、コーパスを用いてその出現傾向を探る。

<sup>1</sup> collocation を「4 語以下からなる語の共起」、colligation を「文法的現象の共起」と定義する。これらに関する詳述は割愛する。

<sup>2</sup> Croft and Cruse (2004: 100) も単語に割り当てられるものとして meaning ではなく purport という単位を提唱しているが、「長い単位」の適用については言及されていない。

### 3. コーパスに見る *microsenses*

#### 3. 1 使用コーパスとサブコーパス

*microsenses* の代表例 *knife* および *card* を Bank of English<sup>3</sup>を用いて考察する。サブコーパスとして、イギリス英語の書きことばデータを分析対象とする。用例と共に示す略称等とともに以下のとおり示す。

Times (全国紙 Times)	News (全国紙)
RNews (地方紙)	Sun (大衆紙 Sun)
Mags (雑誌)	Books (書籍)

#### 3. 2 *knife*

*knife* の単複数形 10, 143 例から無作為抽出した 300 例を分析対象とし、これらを出現パターンによって以下のように分類した。

A: 合成語およびそれに準ずる形の一部として出現するケース……………	66/300
( <i>carving knife, craft knife, flick knife</i> )	
B: 修飾語を伴うケース……………	28/300
( <i>plastic/steel/silver knife, sharp / blunt knife</i> )	
C: 等位接続詞で結ばれるもしくは同格の形をとるケース……………	38/300
D: A~C 以外の、 <i>knife</i> が単独使用されるケース……………	145/300
E: その他	
・ 固有名詞 ( <i>Night of the long knives, Shonen knife</i> )……………	10/300
・ 句表現 ( <i>on a knife edge, twist the knife</i> )……………	12/300
・ タグエラー (動詞用法の混在)……………	1/300

これらのうちで *microsense* の特性が観察できるのは D であるが、前章に述べた目的に基づいて A から C も考察範囲に含めることにする。なお E についてはここでは割愛する。

A の合成語の一部として出現するケースは、全体の 6 分の 1 を占める。コーパス全体の高頻度 50 例においても、*kitchen knife* (t-score<sup>4</sup>: 16.08), *army knife* (t-score: 11.60), *carving knife* (t-score: 10.24), *palette knife* (t-score: 9.94) を筆頭にこのグループが全体の 44% を占める。凶器としての小刀以外の、調理、食事、あるいは絵画に用いるナイフが大半である。これらはあくまで製造に当たり想定された用途であるが、文脈における実際の用途はそれらとは異なることも少なくない。その典型例とも言えるのが、調理用のナイフが凶器として使われるケースである。(傍線は筆者による。以下同じ。)

<sup>3</sup> HarperCollins と the University of Birmingham との合弁事業によるコーパス。2008 年の段階で 450 万語が含まれる。

<sup>4</sup> 二つ以上の単語が偶然に共起する可能性の統計的単位。一般性の高い語を際立たせてとらえることができるため、コーパス言語学ではよく用いられる単位である。

(9) Alan Shreenan, 32, later attacked Robert with a kitchen knife outside Elliot's house in Cardross, Dunbartonshire (Sun).

(10) I tried to kill my husband with a carving knife – I couldn't stop myself (Books).

実に *kitchen knife* の 10 例中 7 例、および *carving knife* の 6 例中 5 例がその本来の目的ではない凶器の意味で使われている。先の引用部分「適切な文脈においては（読みを）指定する形容辞は不要」に従えば、(9) の *kitchen knife*、(10) の *carving knife* を *knife* に置き換えてしまうと正しい解釈に結びつかないということになる。これらは本来想定されている用途と異なる使われ方をする場合、その元の用途を明示するために有標で、つまり合成語の形で出現していると考えられるだろう。

B の *and* や *or* 等の等位接続詞で結ばれる場合もしくは同格用法を取る場合には、それによって意味領域が特定されることになり、合成語用法に準ずる程度にその意味を示唆していると言える。また、これは *knife and fork* で一単位を構成しているとみなされるべきものである。

(11) She put down her *knife and fork* (Books).

C の形容詞が先行するケースにおける形容詞の意味特性には、材質 (*plastic, stainless steel*)、鋭利さの度合い (*sharp, blunt*)、その用途を示唆するもの (*lethal, terrible*) 等などがある。材質等の側面を *knife* はカトラリーまたは取り分けのナイフを指すことが多い (12)。一方、28 例中 12 例出現する *sharp knife* はいずれも料理用包丁を指す (13) が、その対義語に当たる *blunt knife* の 2 例はいずれも凶器として用いられるナイフを表す (14) 点は興味深い。ただし後者の元々想定された用途が料理用か凶器についての判断はつかない。

(12) They had to cut their cake with a plastic knife (Sun).

(13) With a sharp knife, cut the beef into twelve 5mm (1/4) slices (Mags).

(14) [...] as an Englishman sawed at his exposed neck with a *blunt knife* (Books).

これらの出現パターンは ‘cut ... with a ~knife’ もしくは ‘use a ~knife’ という形をとり、いずれにおいても、形容詞が前置詞 *with* または不定詞句 *to use* に後続する。このパターンにおいては *knife* そのものよりもその鋭利さが強調されていると言えるだろう。

A~C においては、当該語の周辺まで含めた語彙的なパターンが適切な読みを選び出す手がかりとなっていることが認められる。

以上をふまえて、*knife* の *microsenses* としての特性を観察してみよう。D は A~C 以外の *knife* が単独で用いられる 300 例中の 145 例であるが、その 91% に相当する 132 例が凶器を表す。このような数的傾向は *microsenses* の位置付けにいくらかの影響を与えるものであろう。すなわち、「下位語の読みのクラス」のそれぞれがニュートラルな立場にあるというよりは、デフォルトで選ばれやすい「読み」があり、「そのうちのどれかを検証する」のではなく、「その語に対して第一

に想起される解釈であるかどうかを確かめようとする」と言えるのではないだろうか。ただし、実際には A~C 同様に、語彙的なパターンが読みの決め手として機能するケースも少なくない。さらに、統語的模式も有効に機能している。D の 145 件中 24 件は ‘cut with a knife’、‘slice with a knife’、‘armed with a knife’ 等の統語的模式中に現れる例である。

(15) They were forced inside by masked robbers armed with a knife, and made to hand over property [...] (Times).

(16) His attacker dropped beside him and slashed the knife across his throat (Books).

以下の ‘cut with a knife’ は (17) のいわば字義通りの例に加えて、(18) のようにメタファー的にも用いられる。

(17) Rabie came into her room, raped her, and cut her with a knife (Mags).

(18) The tension could be cut with a knife as gladiators fought for supremacy (Books).

(18) の固定度はさほど高くはなく、また *knife* を単語単位で解釈することも可能であり、その場合は *knife* を *microsenses* としてとらえることができる。それでもやはり、その文字列は ‘cut the tension with the knife’ のように長くとらえられる方が適切といえよう。このように長い単位に取り込まれてその一部として解釈される場合には、*microsenses* としての特徴は消えてしまう。

### 3. 3 card

*Card* についても、*knife* と同様の手続きで抽出した 300 例を分析対象とする。*card* は他の *microsenses* とは異なり、完全な意味 (full sense) のレベルでより多くの意味を備えている印象があるが、これを客観的なデータをもって確認できるだろうか。そもそも *card* の上位語的意味の想定の方が自体が困難である。この語の出現するドメイン (意味領域) は、少なくとも他の *microsenses* の例である *knife*、*fork*、*equipment* 等と比較して多岐にわたる。

*card* 300 例の出現パターンは以下のように分類できる。

A: 合成語およびそれに準ずる形の一部として出現するケース	203/300
B: 修飾語を伴うケース	8/300
C: 等位接続語を伴う、または同格用法ケース	3/300
D: A~C 以外の、 <i>card</i> が単独使用されるケース	67/300
E: 句表現の一部・その他	19/300

A の合成語の比率は *knife* のそれをはるかに上回るが、さらにその半数は特定の合成語が占める点特徴的である。これに *wild card*、*Christmas card*、*identity card* 等が続き、異なり語数自体はさほど多くない。

*credit card* (41/300, t-score 77.5)

*yellow card* (33/300, t-score 62.8)

*red card* (30/300, t-score 69.1)

B (修飾語) と C (等位接続語、同格) はともに出現数が極めて限られている。B の形容詞は、ほぼ *card* の物理的側面を修飾するものに限られる。

(19) Dab it in swirls over the light blue card to create big, frothier waves (Mags).

(20) She stood up and came round the desk to hand each of the men a small card (Books).

以上は *knife* と同様に語彙的なパターンがそこでの読みを決定づけるものとして機能している。

D の *microsenses* の分析対象となるケースについても、*knife* と同様に統語的なパターンによって意味が特定される傾向にある。

(21) 'I sent Pauline a card to tell her about the baby,' Josie said 'and she sent a lovely card back with a couple of [...]' (Books).

(22) As soon as he signed his card a pint of Guinness was waiting for him from O'Leary, winner of the 1982 Irish Open (Sun).

(23) To claim, call 020 7481 3344 (roi: 0044 20 7481 3344) between 10am and 3pm today. Have your card with you when you call (Sun).

特に (5) の 'Have your card with you (when you call).' は文全体で一つの意味を持っているといえる、いわば常套句である。

*card* についても *knife* と同様に、語彙的および統語的なパターンが読みを特定する傾向にある。すなわち、より長い単位の適用が有効であることが認められる。*card* と *knife* との間に感じられる相違は、*card* には *knife* 以上に出現するドメインにバラエティがあること、またそれぞれの隔たりが大きいことから生じるのかもしれない。

#### 4. おわりに

本稿では、語の多義性の下位分類の一つとして Cruse が提唱する *microsenses* に注目し、新たな観点と方法とによって、その本質をとらえ直すことを試みた。

分析の観点には、Sinclair らの主張に基づいて、より「長い単位」を適用した。語彙的なパターンおよび統語的なパターンが、いかにその場での読みを決定づける機能を発揮しているかという点に着目して考察を行った。また、分析対象として *microsenses* の代表とされる *knife* と *card* を用いたが、これらの *microsenses* としての典型例に加えて、それ以外の出現パターンについてもコーパス分析を行った。これにより、*microsenses* 以外の用法においては語彙的なパターンが、また *microsenses* では統語的なパターンが、読みを決定づける要素として有効に機能する傾向が認められた。

本研究の先には理論や事例検証の成果を辞書編纂に生かすという課題があり、必然的に

microsenses のような特色を生かした記述法を考えることになる。これについては稿を改めて論じることとしたい。

また、ここで取り上げられた語は、いずれも日本語においても外来語として用いられるものである。当初予定していた日本語のコーパス例も用いた考察を加えることは果たせなかった。これについても稿を改めて論じる機会を持ちたい。

## 参考文献

- Croft, W. and Cruse, D. A. (2004). *Cognitive Linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cruse, D. A. (1986). *Lexical Semantics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- (2000). Aspects of the Micro-structure of Word Meaning. In: Y. Ravin and C. Leacock (eds.), *Polysemy: Theoretical and Computational Approaches*. pp.30-51.
- (2004). *Meaning in Language: An introduction to Semantics and Pragmatics*. Second edition. Oxford: Oxford University Press. 1st edn., 2000. Oxford: Oxford University Press.
- Howarth, P.A. (1996). *Phraseology in English Academic Writing*. Tübingen, Max Niemeyer Verlag.
- Sinclair, M, John. (1996). The search for units of meaning. *Textus*, 9, 1, pp.75-106. (Sinclair 2004 第2章に収録)
- (1998). The lexical item. In: Weigand, E. (1998), *Contrastive Lexical Semantics*. Amsterdam: John Benjamins. pp. 1-24. (Sinclair 2004 第8章に収録)
- (2004). *Trust the text*. London: Routledge.
- Stubbs, Michael. (2002) *Words and Phrases Corpus Studies in Lexical Semantics*. Oxford: Blackwell.